
こんな薬屋ありません(^-^ヅ

聖魔光闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな薬屋ありません（ハ・ハ・ハ）

【Nコード】

N6735W

【作者名】

聖魔光闇

【あらすじ】

以前に書いた【200文字小説】《痒み止め》の舞台設定をそのままに、薬屋さんで売っている物をコメディ商品にしてみました。

実際あったら、困るだろう！！なんてつつこんでもらっても困りますが、もし、クスツとでも笑って頂けたら光栄です。

更新は不定期（ネタが思い付き次第？ 時間に余裕のある時？）になります。よろしくお願いします。

体温計（前書き）

超短篇（掌編？） コメディです。

体温計

近所の小さな薬屋で、不思議な体温計を見付けた。

【どんな時でも素早く対応！ これさえあれば、もう他の体温計なんて使えない！】

店のオヤジが書いたのか、黒い画用紙に修正液で、汚い文字が書かれている。

『他のメーカーから、苦情が来るだろ……』

と思いつつも、その体温計のケースを手に取って眺めてみる。

【どんな時でも素早く対応！ これさえあれば、もう他の体温計なんて使えない！】

『同じ事が書いてら……』

しかし、その文章には続きがあった。

【腋下・舌禍・耳・直腸、どこでも素早く正確に！ 測定部位を特定しない世界に唯一の体温計！】

『……』

よく考える！ よく考える！ 測定部位を選ばないって事は……、直腸で使ったヤツを舌……！！

「汚いだろ！ 馬鹿あ！！」

「この薬屋、マトモな物は置いてないのか……。」

体温計（後書き）

もし、リクエストなどありましたら、教えてください。

できるだけ、ネタを振り絞って考えますので……（ ; ; ）

コンドーム

今日も小さなネタを探しに、近所の小さな薬屋までやってきた。

店内に入り、商品の陳列棚をチェックする。暫くウロウロしていると、気になる商品を発見。

【究極の進化を遂げた避妊具。装着感を全く感じさせないコンドーム、ここに登場！】

『またまたスゲー物を……』

さすがに、コンドームの箱をまじまじ見るのには気が引けたが、店内に客は皆無と言っていい程、誰もいなかったので、箱を手にとってみる。

【製造工程において、我社独自の特殊な薬品を使用することにより、装着感を全く感じない商品になっています。他社の商品同様、袋から取り出して、ご使用ください。ただし、人体に危険のある特殊な薬品を使用しておりますので、直接肌に当てないでください】

『なるほど……。直接肌に当てないから、装着感が全く無いって……。ふざけんなよ！！ どうやって使うんだ！』

不思議な商品多数の、その小さな薬屋は、今日も閑古鳥が鳴いている。

体温計2（前書き）

また体温計（ $0, \dots$ ）

体温計2

近所の小さな薬屋で、また不思議な体温計を見付けた。

【一石二鳥の便利体温計登場！】

胡散臭い売り文句が、デカデカと汚い文字で書かれている。

『どうして、黒の画用紙に修正液なんだ……』

なにはともあれ、宣伝されている商品を確認しに行く。

《商品名：耳かき体温計 特徴：耳かきをしながら体温測定が出来るという、優れた機能》

『おお！ 今回は、なかなかマトモな物置いてんじゃん！』

興味をそそられ、パッケージを裏返しながら、確認した。

《使用上の注意：本製品を使用する際、測定部位を耳から出さないようにしてください。耳より外へ出すと、正確な体温が測定出来ません》

『はい？ 耳から出さずに、どうやって耳かきしろと？ やっぱダメじゃん！』

無造作に陳列棚に、耳かき体温計を置いて、今日も何も買わずに薬屋を後にした。

歯磨き粉（前書き）

もいもい様のリクエストお題です。

齒磨き粉

今日も変わらず僕のお楽しみ。近所の小さな薬屋さんは、楽しいおかしなネタの倉庫。

『さあ、今日はどんな商品に出合えるかな……』

薬屋の前に立つと、【受験対策用品販売始めました】と、デカデカといつもの黒画用紙に修正液という、不思議な宣伝がされている。

『薬屋で受験対策？』

疑心暗鬼に駆られながらも、臆する事なく店内に突入。

わかりやすいように、矢印で商品を大々的にアピールしている。

『今回は、いつもと違ってマジか？ でも、薬屋で受験対策……ってのがなあ』

矢印の方向に向かうと、僕は目を疑った。

『こ、これは……。参考書？』

棚に陳列されていたのは、どこからどう見ても、ただの参考書だった。とりあえず、手に取ってページをめくってみる。僕の取ったのは、英語の参考書だけど、どのページを見ても英単語や、英文がビッシリと所狭しと書かれていた。

『参考書？ 薬屋で？ とうとう経営破綻か？』

そう思いながら裏表紙に目をやると、更に驚いた。

【暗記の出来る歯磨き粉《全て覚えて忘れない。あなたの事も忘れない。死ぬまであなたを忘れない》登場。この商品は、歯磨きするだけで暗記が出来るという、画期的な優れた歯磨き粉です。部活やカラオケで、勉強する暇がないという、あなた。勉強そのものが嫌いだという、あなた。勉強しても、全く内容が理解できないという、あなた。これさえあれば大丈夫。さあ、歯磨きするだけで、暗記が出来る、究極の短時間学習を始めませんか！？】

『な、長い……。しかも書いている事がウザくて、あやしすぎる……。つうか、なんつう商品名だ……。怖いわ！ こういう時は、使用上の注意をよく読んで……。』と』

【使用上の注意：この商品は、単語や言葉・公式など、覚えたい事が書かれているページを破り、歯磨きするだけで暗記が出来るという画期的な商品です。一日一枚以上の使用は、脳への負担が大きい為、一日一枚以内で使用してください。裏から5ページ目の袋とじへ続く】

『以外と真面目なことが……。』って、袋とじ？』

気になって5ページ戻ると、袋とじの右端のミシン目外側に、【但し、吐き出すと効果はありません。また飲み込むと、大切な記憶を失います】と書かれてあった。

『や、ヤベエ！ やばかったあ。危つく騙されるトコだったぜ……。』

額の汗を拭くと、一目散に親友の家へと急いだ。この商品の報告をする為に。

『みんな！ ダメだぞ！ あんな商品買ったら、何を忘れるのか、わかったもんじゃないからな！』

とは、営業妨害になるので、口が裂けても言えはしないけど……。

歯ブラシ（前書き）

こちら、もいもい様のリクエストお題です。

歯ブラシ

今日も近所の小さな薬屋で、小さな小さなネタ探し。

『うーん。最近、冷やかし担当の、常連客になってる?』

とまあ、変なことを考えるのは止めにして。薬屋の前に来た。

『あれ? 何もない。開いてる? 潰れたのか?』

と、入口の扉をガラガラと開けると、中は何も変わっていなかった。

『あゝ、よかった。潰れてなくて……って、は! 僕は、何の心配をしているんだ!?』

額から流れ出る嫌な汗を拭いながら、店内を散策。と、見つけた。今日もあった!

『いかにも怪しい商品! その名も、《歯を磨くのに、私以外を見ちゃイヤ》だ。馬鹿じゃないのか?』

【この商品は、歯ブラシ本体から、歯磨き粉を出す事によって、口腔内に適応した適量の歯磨き粉を使用でき、口腔環境を快適に保ちます。但し、お試し用の歯磨き粉は、約1回分しか混入されておりませんので、歯磨き粉が無くなり次第、全国に4ヶ所あるお近くの我社の出張所まで、起こしください。使用上の注意。この商品は、他社の歯磨き粉を無理矢理混入されると破損してしまいます。また、不使用時の清潔保持の為、不使用時は、ブラシ全体が、歯ブラシ本

体内部へ収納される仕組みになっています】

『と、いう事は何か……。1回分のお試しが終わったら、わざわざ
歯磨き粉を入れてもらいに行つて、使わないと、ただの棒って事か
！？ 何が何なんだよ！ バカヤロー！！』

やるせない思いと共に、僕は歯ブラシを放り出すと、店外へと飛
び出し、走り去った。

『どうしたんだ？ おい！ どうしたんだ？ ……僕』

消炎鎮痛剤

今日も懲りずに、近所の小さな薬屋にやって来た。今日は、一体どんな商品に出合えるのかとウキウキしている。

【痒みも痛みも一度にオサラバ。一度経験したら、もう病み付きの消炎消痒鎮痛剤入荷しました】

いつもの「どうしてこれだ!」って宣伝用紙が貼られている。

『今日は、この商品に決定!』

と、店内に入った。

「いらっしゃいませ〜!」

いつもは知らんぷりの店主が、笑顔で挨拶してくる。どういう風の吹き回しだ……?

『気持ち悪!!!』

てな事を思いながら、目標の商品の前に到着。一先ず、手に取って眺めてみる。

《商品名:あなたはきつと、あたしのと・り・こ》

『うげえ。いきなりヤバイ感じが……』

思わず商品を落としてしまったが、もう一度拾い上げてよく見て

みる。

【効能：発熱・肩凝り・腰痛・関節痛・筋肉疲労・筋肉痛・打撲・ねんざ・しもやけ・かゆみ・かぶれ・しっしん・じんましん・皮膚炎・食欲不振・熱中症・下痢・便秘・虫歯・ぎょうちゅう】

『ちょ！ ちよつと待って！ 消炎消痒鎮痛剤なんだよな、コレ？
どうして、しもやけに効くの？ 食欲不振・熱中症・下痢・便秘・虫歯・ぎょうちゅうって何？』

そんな疑問を抱く僕の頭に、更なる疑問が飛び込んできた。

【使用上の注意：本薬品を服用時は、最低8時間の間隔を開けて服用してください。15歳以上1回1錠。15歳未満1回3錠。本薬品は、日本における入手不能なドラッグを使用している為、中毒性があります。しっかりと認識の上、服用してください】

『服用間隔は、まともだな。でも、どうして年齢が上がると、服用数が減るんだ？ しかも、入手不能なドラッグって？ どうしてドラッグって表現したの？』

その薬品の危険性が、本能的にわかる気がして、急いで店を後にした。

「ありがとうございました〜！」

また店主が叫んでる。

『気持ち悪！〜！』

消炎鎮痛剤（後書き）

リクエストお題、お待ちしております。

できる限り活用させていただきますので、御遠慮なさらずに、申し付けください。

座薬（前書き）

敬愛様のリクエストお題です。

座薬

うーん。尻がムズムズする。本当に薬が必要かもしれないけど、僕が薬屋に行くと、結局ここに辿り着いてしまうんだ。

【お尻の悩みは座薬で解決。お尻の穴に薬を入れて、ゆっくりゆっくり時計回しに入れていく。そして……………】

『誰が店の外側に、絵付きでこんなに細かく説明したんだよ……。馬鹿だ。絶対馬鹿だ……………』

店内に入ると、店主が親指を立てて、ぐるぐると円を描いている……。な、なんなんだ……。気持ち悪くなってきた。

『今日のヘンテコ商品は……………』

【出ましたお尻の救世主！ 出たといっても、お尻から出たんじゃないからね】

『な、何だ……。この、やけに軽い感じは……。しかも汚いし……………』

【お尻の薬は痔だけじゃ無いぜ！ 解熱薬も下剤もお尻から入れられる。イエーイ！】

『薬の注意書きが、こんなに軽くていいのか……………？』

【と、いうわけで、解熱作用と下剤作用・痔用作用が合体した座薬登場〜！】

『軽い。軽すぎる。しかも、いつもと同じくこの商品名、《お尻、お尻がいいのお！》どこの会社だ！ 絶っつつ対馬鹿だろ！？』

と、いつもの使用上の注意に目を通す。

【この商品は、お尻専用総合医薬品となっています。（不認可）全ての効果が同時に適用されますので、気をつけてご使用ください】

お尻のムズムズから、商品を購入しそうになっていた僕は、そこまで読んでその薬を落としてしまった。

多分、僕のお尻は痔だと思う。けれども……。

『けれども……。この座薬入れたら、下痢になって、尚且つ血圧も下がるのかよー！』

落とした座薬も拾わずに、カウンターの横を通ると、店主がイヤラシイ目で、僕を見ながら立てた親指をぐるぐると回していた。

痒み止め【200文字】（前書き）

これを書こうという気になった元祖の話をねじ込んで……っと。

痒み止め【200文字】

近所の小さな薬屋で、不思議な痒み止め軟膏を見付けた。

「効能は……つと」

【かゆみ、かぶれ、かゆみ、しっしん、かゆみ、虫さされ、かゆみ、じんましん、かゆみ、しもやけ、かゆみ、皮膚炎、かゆみ、あせも、ただれ、かゆさ】

『どんだけ痒いんだ！ しかも何故に最後だけ《かゆさ》』

でも、何よりも変なのはこの名前だ。

【連泊までは許してあ・げ・る】

《二日に一度塗れば効く》

それが売り文句なのはわかるが、センスねえのかよ…。

痒み止め【200文字】（後書き）

一先ずひとまとまりにしてみました。（入れなくても良かった気がするが……。まあ、入れちゃったモンはしゃあねえか！？）

ドリンク剤（前書き）

塩様のリクエストお題です。

ドリンク剤

別に今日は、用事があった訳でもない。本当に、ただ本当に、近所の小さな薬屋の前を通りかかったただだった。

【大人しか飲めないドリンクなんて、クソくらえだ！！】

いつになく、キツイ剣幕の画用紙が貼られている。

『なんなんだ？ どうしたってんだよ！？』

と、結局店内へ。

店主が指差す方向に進むとその商品はあった。

【二日酔い・悪酔い防止にこの一本】

『なんだ。ただのドリンク剤じゃないか！？』

それでも少し気になって、よく見てみる。

《小児用ドリンク剤。これで、僕も私も大人の仲間入り》

『ちょっと待って！ これって、子供に酒を飲ませる商品？ それは、ヤバイっしょ！』

とうとう法律に触れる商品に手を付けたのかと思い、ビンに貼られた紙を真剣に観察する。

【この商品は、小児用に製造された二日酔い・悪酔い防止のドリンク剤です。但し、未成年の飲酒は法律で禁止されています。お酒を飲むなら二十歳から】

と、書かれていた。

『じゃあ、何でこんな商品作っただよー!!』

ドリンク剤を壁にぶつきたい衝動に駆られたが、そこは冷静に落ち着いて、味見だけでも……と、今日はそれを一本買って店を後にした。

「おや？ 珍しい」

あの店主の言葉は聞かないで。

薬屋を出ると、フタを開け一気飲み！

『ん？ ただのオレンジジュースじゃねえか！ ぼったくりじゃねえか!!』

入浴剤（温泉の素）（前書き）

このはな さくら様のリクエストお題です。

入浴剤（温泉の素）

温泉。それは、日本人の最大の癒しにて、最高の療養スポット。
でも……。

『僕には、そんな温泉に行く、お金も、時間も、無いんだああ！！
ハアハア！』

と、いう訳で、今日もやって来ました近所の小さなあやしい薬屋さん。ここならきつと、見たこともないような、入浴剤が置かれているに違いない。

ガラガラとガラス戸を開けて入店。

『う！ な、なんだ……、こ、この臭いは……。店全体から、漂っている気がする……。と、今は入浴剤だ。入浴剤……と』

陳列棚を端から順に見ていくと、あつたよ。あつた。でも……。

『あれ？ 一番の一押し入浴剤？ 秘湯巡り？ って一つしかないじゃん！』

【家庭のお風呂で温泉気分。効果が持続するから、リピーター続出！ もう二度と、他社の入浴剤なんて見えなくなること、間違いないしー！】

『なんだ、この強気な商品は……。【商品名《この温もりがたまらない》って、ネーミングセンス！ もう少し何とかならんのか！？』

【この商品は、家庭用入浴剤です。浴槽一つに本品を一袋入れるだけで、あなたのお好みの温泉に早変わり。香りは気からと言いますので、入りたい温泉に入った気分でお楽しみください】

『へ？ どこかの温泉みたいになるんじゃない？……』

【使用上の注意。におい成分が強く、身体ににおいが付着します。（付着する可能性がありますなんて、あやふやな事は言いません）また、効能はあるかもしれませんが、ないかもしれません。効能：しもやけ・リウマチ・肩凝り・腰痛・四十肩・あせも・アトピー・水虫・短足（に効きますとは言いません）】

『なんだ！ この商品は、なんだ！！ ある意味、効能……皆無じやんか……ってこの臭い！ ……店長！！』

慌ててカウンターを見ると、店主が黄色いオーラに包まれて、手を振っていた。

『こんな臭いが付いたら、どこにも行けないじゃないか！？』

そう思って、慌てて外に出たけど……。僕……。なんだか臭くない？

体温計3（前書き）

また、体温計……

体温計3

さあて、今日も始まる近所の小さな薬屋探険。今日は、どんな不思議に出合えるのかなあ。

『あれ？ 何も貼ってない……。目玉商品はないのか？』

一先ず店内に入ると、狭い店内を一周する。ふと、店主の前の、カウンターに置かれた体温計が気になった。

「おや？ これはこれは、毎度何も買わない迷惑なおお客様ではありませんか。ん？ こちらが気になりますかな？」

店主が、カウンターに置かれた体温計を手にとった。僕は思わず頷く。

「流石、迷惑なお客様。見る商品が違いますな。これは、悩みを解消する優れた機能が付いた、便利体温計でございます」

店主の差し出したその箱を確認する。

【腋の匂いでお困りのあなたに画期的な体温計が誕生。測定部位が超振動することにより、汗腺閉鎖症に伴う腋臭^{わきが}を改善。しかも、高性能体温計付き】

『測定部が熱を発したら、正確な体温なんて、測定出来ないんじゃない？』
……』

心の声は、表情に現れていたが、僕は無言で体温計を返却すると、

黙ったまま薬屋を後にした。

「毎度、冷やかしありがとうございます。またのご来店お待ちしております」

嫌味ととれるその言葉を、背中いつぱいに受けながら……。

マスク（前書き）

画期的商品？

マスク

【何も通さない魔法のマスク入荷しました】

近所の小さな薬屋の前には、画用紙に修正液で書かれた紙が、デカデカと貼られている。

『何も通さないマスク……。それが本当なら、もうインフルエンザも花粉も恐くないな』

疑いの気持ち強い中、店内に潜入する。目玉商品展示コーナーを見ると、それはそこに鎮座していた。

【もう恐れるモノは何もない。インフルエンザ、花粉だけでなく、MRSA、細菌兵器に至るまで、強固にガード。繰り返し使用でき、経済的。科学の粋を集めたマスクの最終形態がここに！！】

『うおおおお！　きた！　ヤベエのがきた！　これはスゲーだろ！？』

これは購入しないと、損をすると思い価格を確認する。《メーカー希望小売り価格2・789・800円》

『に！　二百七十……！　ダメだ……、か、買えない』

ふと店内の価格表が目にとまった。《先着1・000名様に限り、特別価格、メーカー希望小売り価格の99%offの27898円で提供します》

『え！？ マジ？ って、ん？ 怪しくね？』

パッケージを真剣に隅々まで確認する。そこで見付けた老眼では見えないような文字。

【使用上の注意。このマスクを着用することにより、外気との接点
が100%遮断されますので、定期的な息継ぎをしないと、窒息し
てしまいます】

『やっぱ、怪しさ全開商品じゃねえか！ 前言撤回！！』

ポケットから取り出した財布を、ポケットに押し込むと、店主を
見ないように店を出た。気のせいかもしれないが、店主の舌打ちが
聞こえたような気がした。

マスク（後書き）

こええええ！！

湿布薬

ここは近所の小さな怪しい薬屋。僕はこの店の冷やかし担当常連客。今日もネタになる怪しい商品を探して、店内を徘徊中。

『普通の薬は、面白みが足りねえからな……。つと、うん？』

僕の興味を引いたのは、筋肉痛や肩コリ用の湿布薬展示コーナー。

【あなたの痛みの部位に、確実に留まり、その痛みを根本から解消多汗症で、薬剤剥がれにお困りの方の救世主。《もう二度とあなたを離さない》ここに登場！】

ネーミングセンスもさることながら、怪しすぎる。とりあえず、使用上の注意を探して、箱を眺め続ける。

『ほら、やっぱり……』

箱の隅に、小さな文字で書かれた注意書きを発見。

【製品の密着性を極限まで引き出すため、強力な接着剤を使用しております。貼り換えの際には必ず、お近くの外科医にご相談ください。本製品の持続効果時間は、8時間となっています】

『普通に剥がすと、皮膚が付いてくるとか……？　っていうか、この注意書きの書き方、詐欺じゃねえか？』

そうして今日も、僕は店主の小言に耳を貸さず、薬屋を後にするのだった。

湿布薬（後書き）

そろそろストーリー性混入？

粉ミルク

近所の小さな薬屋には、ネタが沢山あるんだけど、あるんだけれど……、あの店、どうやって経営維持しているんだろう。

【赤ちゃんの栄養補給にこの一缶。もう二度と、粉ミルクの買い足しに足を運ばなくてもOK】

『あれ？　なんだかいつもと感じが違う』

それもその筈、白い画用紙に赤い絵の具で書かれていた。ただ……。

『水の量、多過ぎだろ！　文字から絵の具が流れて、ホラーっぽくなっちゃってっぞ！』

粉ミルクは必要なかったけれど、店内に入ってみる。

『わかりやす！　しかも、デカ！！』

商品名にひねりがなく《粉ミルク》と書かれた、一缶百キログラムのその粉ミルクは、店のカウンター横と、店主の隣に山積みになっていた。

『ちょっと、近寄り難い場所にあるな』

とも思ったが、いつもの習性で、手に取って眺めてみる。

『お、……重たー！！　これ買って、どうやって持って帰んだ？』

余計な思考が脳裏を駆け巡るなか、商品に書かれた内容を確認してみようとしたその時だった。

「あんた……。いつも、うちの店の特殊商品をよく見ているけど、興味あるのかね？」

突然、店主に話し掛けられた。

『いや、ただのネタ探しに……』

とも言えずに、軽く頷いて粉ミルクに書かれている事を確認する。

【これは、正真正銘《粉ミルク》です。どこからどう見ても《粉ミルク》です。何度も粉ミルクを買い足しに、走らないといけない主婦の皆様の味方です。これ一缶あれば、もう買い足しの必要なし】

『た、確かに……。これだけデカけりゃあな……。でも、これは絶対裏がある。そうじゃなきゃ、このデカさは、無理があるだろ！？』

と、更に缶をよく見ると、

【原材料名：脱脂粉乳】

とだけ書いてあった。

『え？ 脱脂粉乳百パーセント？』

その他の混入物がないか調べてみるも、脱脂粉乳だけだということが発覚。

『これ、買う人いるのか？』

そう思いながら、店を出ようとすると、また、店主に声を掛けられた。

「買う買わないは、個人の自由だ。でもな、少年。君ほど、隅々まで見る人は、そうそうおらんぞ。君には素質がある。もし、興味があるなら、また来るといい。今度は、もっと君のためになる話をし
てあげよう」

そう笑顔で言った途端。

「冷やかし、ありがとうございました。またのご来店をお待ちしています」

と、真顔で付け加えた。

『な、何？ ためになる話？ 素質があるの？』

この時は、これが何の事だか、全くわかっていなかった。

粉ミルク（後書き）

どんどん更新が、むずかしくなっていく……。

大人用おむつ

僕の家の近所にある小さな薬屋さんは、ちょっと変わったあやしい商品が揃っている。今日も、特に買うものはなかったけど、また来てしまった。そして、これ……。

【介護用品の販売始めました】

簡単な言葉が、切り抜きのダンボールにマジックペンで、書かれている。

『あれ？　なんだか、まともになってきてないか？　このまま、商品もまともに……、なるわけないか！？』

店の中に入ると、店主が大量のダンボールに埋もれるようにして座っている。

『か、顔だけ見えてら……』

思わずクスツと笑ってしまった。

『と、今日は……。介護用品……っ』

探す必要もなく、大人用紙オムツの山があった。

「今日の目玉商品だ」

声が聞こえた瞬間、振り返ると、店主がダンボールに埋もれて、顔だけ出したままドヤ顔をしている。

『いや……。そんなドヤ顔をされても……』

【オムツの中に排泄した感覚がわかるオムツ。近未来型オムツは、時代遅れ。たくさん吸収して、感覚もわからない。そんな紙オムツはもう古い。お年寄りも人間です。オムツなんかで、終わらせてはいけない！】

『……え？ これだけの事書いてて、オムツ？』

チラッと、店主の方を見ると、よく見ると言わんばかりに、商品を指差している。

再度、オムツのパッケージを観察する。

【排尿吸収量。一般的排尿量の約半分】

『へ？ 半分？ じゃあ、オムツの意味ないじゃん！？』

再度、店主を見ると、親指を立ててドヤ顔をしている。

『もう意味がわかんねえ……』

と、オムツに興味もないので、退散することにする。カウンター
の横を通り過ぎようとすると、

「ちょっと待ちな。今日は、ためになる話を聞いて行きな」

と、何か古い映画の影響なのだろうか、口調が若干変わっている。

「君は……、ここで、働いてみる気はないかね？」

唐突に突拍子もない事を言われ、頭の中をクエスチョンマークが飛び交っている。

「まあいい。次にここに来た時に、説明してあげよう」

そう笑顔で言った途端、真顔に戻って「冷やかしありがとうございまして」と言っていた。

とりあえず、そのまま表に出た僕だったけど……。

『なんだか、ヤバイ事に巻き込まれている気がする……』

そう……思った。

大人用おむつ（後書き）

おおっう！ どんどん書く内容がややこしくなっていく……。連日更新、どこまで可能なでしょう……。

うがい薬

近所の小さな薬屋……。

「君は……、ここで、働いてみる気はないかね？」「まあいい。次にここに来た時に、説明してあげよう」

『あの言葉……。嫌な予感がする……』

そう思いながらも結局、ここに来てしまう僕。そして、表から薬屋を眺めている僕。そして、あの黒い画用紙に書かれた白い文字。

【口腔ケアに、たくさん使ってもつたいないというあなた！！ 今すぐ買ってみて。新登場の画期的うがい薬！】

『とうとう、売り文句に【買ってみて】と付けてしまったか……』

とは思いつつも、そのネタ的誘惑に負けて店内に入ってしまった。

「いらっしゃいます」

店主が、不気味な声で誘惑している。ひとまず店主は無視して、目的のうがい薬を探す。

【喉にこびりついた雑菌も、歯垢も、口臭雑菌も、全てまとめてノックアウト！ 口腔ケアの救世主《もう歯磨きなんて古臭い》登場！】

毎度の事ながら、ネーミングが意味不明だが、その内容に興味が

わく。

『うがい薬で、口腔ケア？ しかも、歯磨きしなくて、虫歯にならない！？ ありえない。そんな事が、あつてたまるか！』

胡散臭さ全開のその商品を手にとって眺める。

【使用上の注意。一日三回以上の使用は、お避けください。薬剤の成分が強すぎる為、口腔環境が悪化する恐れがあります】

『ま、まともだ……。いいのか？ この薬屋で、こんなまともな商品売っていいのか？』

疑い始めたらキリがない。僕の頭の中では、この薬屋にまともな商品なんてなかった。

「ちょっと持って来な！」

突然、時代錯誤な店主の声が聞こえたので、カウンターの方面を見ると、店主がカウンターに片足を乗せて、人差し指で誘っている。

『おいおい……。そこは、土足厳禁じゃないのか……。？』

とは思いつつ、うがい薬を持ったままカウンターに近付く。

と、突然、店主が商品を奪い取ったと思うと、おもむろにパッケージを開けだした。そして、目の前に掲げられた白い紙。

『……………！ 取り扱い説明書！！』

ぶん取るように、手に取るとパッケージと違う個所を探す。

【この商品は、細菌駆除のため、強力な薬剤を使用しています。飲み込むと、何かしらの障害が起こる可能性があります。必ず、本剤を使用後は、一般的薬品会社のうがい薬にて、口腔内を洗浄してください】

『あつた……。しかも、中に……。詐欺だ。しかも、あからさまに確信犯だ……。』

店主の顔を覗くと、何か納得したように頷くと、パッケージをテープで止めて、カウンターの後ろに置いた。

「で……。働いてみる気になったかい？」

何が『で……。』で、『働いてみる気に』なのかさっぱりわからない。

「そうか、じゃあ君の仕事を紹介しよう」

ちよつと待ってくれ。何が『そうか』なんだ！？ 僕の仕事って何だ？

「じゃあ、こっちに来てくれるかい？」

納得も理解もしていないのに、店の奥へと案内される。そして、ネタ探しの旅は、悪夢の旅へと変わっていくのだった。

「ようこそ！ 裏日本、うぶんジャポンへ！」

うがい薬（後書き）

さあ、物語の急加速です。

ただ、毎回何かの商品だけは書いていきたい気がします。

リクエストお題募集中。ネタでもいいですよ。（↑「それは自分で考える！」と自分にツツコミ）

コンタクト洗淨液

近所の小さな薬屋さん。ただの変な薬屋さん。ちよつと前まで思ってた。そんなトコだと思ってた。

近所の小さな薬屋さん。今日は、記念すべき？ 初出勤！！

ようこそ！ うふふんジャポンへ！

『……って、うふふんジャポンのネーミングが既にヤバイ。僕の仕事……』

店主に店の裏に案内されて、EVに乗った。EVが動くこと十数分。『どこまで行くんだ？』と思っていると、着いた所は、怪しい薬品工場。店主は、僕に言う。

「明日からここが、君の仕事場だ」

全く理解はしていなかった。けれども言い渡された僕の仕事。

【薬品の特殊効果の発案と、詐欺にならない程度の、注意書き場所の提案】

そして今日僕は、今日の開発商品《コンタクトレンズの洗淨液》の特殊効果を考えて、そこにいる黒い全身タイツの研究員に伝える仕事が始まった。

『コンタクト洗淨液の特殊効果……。コンタクトレンズを洗う商品。しかし、コンタクトレンズを百パーセント洗淨し、新品同然にする

事は不可能だ。という事は……』

【コンタクトレンズが甦る。買ったばかりの新鮮な装着感覚へ！
レンズに付いた雑菌を百パーセント洗浄するから、眼病予防にもう
ってつけ！ 《一つ目小僧も大喜び》誕生！】

『……って、ヤバイ事してない？ バレたら死刑じゃないの？』

とは思いつつ、原材料名の後に【但し、薬剤を必要以上使用しないでください。確実にレンズが溶けて無くなります】と明記させる。

そして今日の仕事が終わった。頭を絞って考えた商品なのに、かなり後味が悪い。

十数分EVに乗って、薬屋に戻ると、店主が僕の肩にポンと手を置いた。

「明日は、また商品観察に来るがよい。明日は、裏日本うふふん
ジャポン について教えてやろう」

時代錯誤の口調でそう言うと、「今日も冷やかしありがとうござ
いました〜！」と、店を追い出された。

『僕……。いつ、捕まるんだろう……。』

頭の中には、罪の意識が渦巻いていた。

コンタクト洗淨液（後書き）

書いてる内容は、大差無いですが、以外と難しく感じるんですねえ。

サプリメント

近所の小さな薬屋さん。小さなネタが転がる店の筈だった。しかし、裏日本、うふふんジャポンへようこそ！　って事になって、今や僕は犯罪者？

今日は、出勤しなくて良いと言っていたので、通りすがりに立ち寄ってみた。

【身体の資本は、栄養から！！】

最近思っのだが、この宣伝用紙、あの店主が書いてるんじゃないんじゃないのか？

と、店内へ。今日の目玉商品は……、サプリメントか……。

『て言うかさ、毎日毎日目玉商品ころころ変えて、どうすんの？　って、僕が考えても仕方がないか……』

【ダイエットをすると、気になるのが栄養バランスの偏り。だからと言って、栄養バランスを気にしたら、ダイエット出来ない。そんなあなたに、新商品。《私はこれでキレイになりました！》】

『……っと、もうツツコミを入れるのも面倒臭いな。とは思いつつ、恒例行事なので、「誰がキレイになったんだよ！？」と、これでいいか……。ええっと、何々？』

【このサプリメントは、他社の販売するサプリメントのように、個別に効果を分けていません。そのため、一日に必要な栄養が、毎食

時に一粒飲むだけで摂取できます。しかも、満腹感を得られる効果も付いているので、間食の心配はありません】

か……。

『コイツのヤバイ点は……。ゲツ！ 商品の蓋の裏側に書いてやがる！ 絶対捕まるぞ！ 詐欺だろ！？ 確信犯的詐欺だろ！？』

【この製品には、膨張剤が大量に混入されています。一食につき、一粒以上摂取しないでください。また、栄養成分を全て混入したため、どんな副作用があるか不明です】

開けてしまった商品を店主の所に持って行くと、店主は何も言わずにそれを受け取り、そのままゴミ箱に放り込んだ。

「あの……」

僕が口を開いた途端、

「じゃあ、今日は、裏日本うふふんジャポンの説明だったのう」

と、既にスイッチが入っている。

店主の口調で話されると、かなりウザイので、簡単に説明するとこうだ。

【裏日本うふふんジャポンは、日本の経済情勢を黒字化させるべく設立した闇の薬品販売業者らしい。しかも、この店で売られているあの商品達にも、きちんと注意書きがされているので、苦情がきてもよく見ないのが悪いと、追いついてるらしい。そして一番質が^{たち}

悪いのは、製造販売国・製造会社が明記されておらず、一定の場所で販売を行う事は、ほぼ皆無だという事だ。省略して言くと、計画的詐欺会社。しかも、国営の。このうふふんジャポンの総責任者は、僕の目の前にいるオッサン。そして、表舞台の日本が国債を増やす一方、うふふんジャポンが、国債を減らしているらしい。つまりだ。裏日本うふふんジャポンは、国が認知している、国営のワールド詐欺会社って事だ】

「だから、僕は……」

そう言おうとして、口を開くと、

「やはり、僕の目に狂いはなかった……。これからも頼むぞ。若人よ」

と、いつもの何かに取り付かれた台詞と共に、薬屋から追い出された。

『あ、明日から……、どうしよう……』

いつにも増して、僕は重たい足取りで家に帰っていくのだった。

サプリメント（後書き）

ちよいと無理押し？

絆創膏

ここは悪事の拠点。うふふんジャポンこと、近所の小さな薬屋さんだ。今日も、嫌々出勤してきた。

『そついえば、仕事って事は、給料あるのかなあ』

店に入って、店主に挨拶すると奥のEVへ向かう。

『さあ、いくら公認とは言っても、悪事は悪事。確信犯の詐欺的行為。はあ……、やる気が出ない……』

しかし流石はEV。人の気持ちなど、知ったことかと薬品工場へ到着。

「おはようございます！ 主任！」

「先生。おはようございます……！」

「おはようでござんす！ 師匠！」

「おはようございますです。主将！」

『なんだかなあ。主任？ 先生？ 師匠？ 主将？ バラバラじゃんか！？ って、そんなガラじゃないし……。てか、おはようござんすって、どこの言葉だ？』

黒タイツの挨拶をかわして、デスクへ向かう。

『で、今日の商品は？』

デスクに置いてある書類に目を通す。

『絆創膏か……。これは、ちょっと大変そうだな。特殊効果を付けると、詐欺商品ではなく、優良商品になってしまう可能……。性？
って、僕は何を考えているんだ！？ よく考えてみる？ 詐欺紛いの商品を開発するよりも、最優良商品を開発する方が、よっぽどいいじゃないか！？ そうだろ？ そうなんだよ！ って、僕は何を独りで、ブツブツと妄想しているんだ！ そうと決まれば……』

【繰り返し使える魔法の清潔絆創膏登場。傷に当たるガーゼ部分が常に清潔になるようになっていきます。《ばい菌バイバイ・ガーゼでガード》】

『ってあれ？ 常に清潔？』

「主任。注意書きは！？」

黒タイツに声を掛けられハツとする。

『どうして、注意書きが必要なんだ？ 優良商品に注意書き？』

小首を傾げながら、「じゃあ、取り扱い説明書に」と言っておく。

【但し、ガーゼを清潔に保つ為に、傷口から出る菌も、完全にカットします。使用時は、別売りのガーゼを別途使用してください】

今日は良い気分だ。詐欺紛いのイカサマ商品などではなく、優良商品を開発したのだから。

薬屋に戻ると、店主に笑顔で「お疲れ様でした!!」と言って、外に出た。うん！ 空気が清々しい！

『明日からも、この調子で頑張ろう!』

その僕の後では、店主が意味深な笑みを浮かべて、僕を見送っていた。

絆創膏（後書き）

深みにはまっていくな、僕、この後どうしようか……

禁煙補助薬

裏日本 うふふんジャポン 表舞台に立つ事はなく、影から日本を支える経済破綻しそうな日本を救う救世主。そう、この小さな薬屋こそが、その入口でその総本山。僕は、偽善的詐欺紛い商品ではなく、優良商品の開発を行っているんだ！

「おはようございます！」

挨拶と共に薬屋に入ると、店主に一礼してから、EVの方へと向かう。

「なんだ……。声、出るのか……」

と、少し落ち込んだような声が聞こえた。

『え！？ 何！？ 声出ちやまずい！？ てか、黒タイツに指示する時、口で言ってますけど！？ なんだよ！ あの、あからさまに嫌な態度は！？』

EVに乗っている間、店主の一言にムカつきまくっていたが、薬品工場に着くと、心機一転、今日も頑張ることにした。

「おはようございます！ 主任！」

「先々生！ おはようございます！！！」

「おはようでござんす！ 師匠！」

「おはようますですございます。主将！」

『パ、パワーアップしてる……。なんだ……。あのオッサン声で、ぶりっ子口調は……。「おはようでござんす」もはや、何語？ 最後のヤツは、もう……。ツッコミたくない……。』

一気に疲れた思いで、デスクまで行くと、椅子に腰掛けてから、書類を目を通す。【禁煙補助薬】と大きな題目を付け、その説明書きが書かれてある。

『……。あのガムみたいな物や、貼るタイプの物が……。僕には必要のない物だけど……。』

とは思いつつも、これは仕事なので、早速案を考える。

『禁煙補助薬の優良商品。どうすれば……。……。そうだ！！タバコを作れば良いんだ！ ニコチンもタールも入っていない、火を点けて吸う紙巻きタバコを！ そうすれば、タバコを吸ってる気分のまま、体内からニコチンが消えて、禁煙成功率アップじゃないか！？ うわぁ！ 僕って、天才か！？』

そして完成した商品。

【タバコみたいな禁煙補助薬《吸って！ 私を吸って！ もっと吸って！！》登場！】

『このネーミングセンスは……。あの四人の誰かなのか……。？ まとも？ ぶりっ子？ 異人？ 変人？ ……ま、どれでもいいっか。今日も良い仕事をしたなあ！』

【この商品は、ニコチンを含まず、体内よりニコチンを無くす為に作られた禁煙補助薬品です】

『これが世界に出回れば、タバコを吸う人がいなくなるかもしれないじゃん！　じゃ、今日もお疲れ！』

黒タイツ達に手を振ってEVに乗り込む。世界平和の為の商品を手掛けるのは、本当に素晴らしい事だ！

そして今日も、ルンルン気分で家へと帰った。

【この商品は、ニコチンを含まない代わりに、アツミゲシを使用しています。また、葉の安定性を保つタールの代わりとして、微量の接着剤を使用しています。ご使用の際には、細心の注意をしてください】

という文章が、商品の箱裏側に書かれていたのを、僕は知らなかった。

禁煙補助薬（後書き）

後書き必要ですか？

包帯

今日も始まる。うふふんジャポンでの僕の優良商品開発の仕事が、近所の小さな薬屋に入ると、店主に一言挨拶してから薬品工場へ。

EVに乗っている間も、今日はどんな素晴らしい特殊効果を付けようかと、ウキウキしてくる。

EVの扉が開いて、職場に降り立つ。

「おはようございます！ 主任！」

「せーん生！ おはようございまーすっ！！」

「はようこんす！ 師匠！」

「おっはー！ で、ございますです。主将！」

『どんどんエスカレートしていくよな。コイツら……。しかも異人「はようこんす」って、どういう言葉だ？ 突っ込んだ方が、いいのか？』

うんざりしながら、黒タイツを横目にデスクへ行くと、今日の商品は包帯だった。

『包帯か……。付け外し可能な物は、既にあるし……。ゴム状の物もある。カラフルな包帯なんて、血の色がわかり難いからパスだろ？ うーん。簡単そうで難しいな……。……。って、おい！ あるじゃんよ！？ 包帯ってさ、ハサミで切り難いって事ない？ ハ

サミの調子が悪いと、切れなくて四苦八苦するんだよな。じゃあ、それならば!!」

【手で簡単に切る事の出来る包帯《私そんな軽い……》】

「ってちよつと待った!」

大声で黒タイツに向かって叫ぶと、黒タイツ達が一斉にこつちを向いた。

「この商品名決めてんの誰だ!？」

そう言つて、目の前に来た商品名の書かれた紙を掲げる。すると、一人の黒タイツが恐る恐る手を挙げた。

「み、見分けがつかねえ………」

「ちよつと、挨拶してみろよ!」

手を挙げた黒タイツは、小首を傾げながら「おはようございます! 主任?」と言った。

「え!?!」

驚きのあまり固まってしまった僕は、「ありがとう」とだけ言つて座ってしまった。

「まさか……あのまともが………」

【手で簡単に切る事の出来る包帯。《私そんな軽い女じゃ無いんだ

からね!」ハサミで切るなんてもう古い。必要な分だけ使用したら、ピツと切るだけ。いつでもどこでも使える奇跡の包帯、ここに推参!

『ツツコミどころが多過ぎて、どうしたもんかな……。まずネーミングセンスってか、包帯は女だったのか? ピツと切るだけって、どうやって切るんだよ!? で、推参! って、ちびっこ用のヒーローか!? つ、疲れた。もう……帰る』

デスクを離れ、トボトボとEVに向かう。

「お疲れ様でした! 主任!」

「お疲れ様! せんせ!」

「乙です! 師匠!」

「おつかれさん。主将!」

もう黒タイツの相手は疲れるので、片手を挙げて立ち去った。

EVを抜けて現実世界に戻ると、今度は店主が、僕を呼んでいる。何かとは思ったが、無視する訳にもいかなないので、店主の下へと行く。

「明日、儂と共に飯でも食いに行かぬか? 儂が休む故、君も休みにしてやろう!」

時代錯誤な言葉で、また意味不明な事を言っている。しかしどうせ拒否出来ないので、軽く頷いて店を出た。

「では、明日この前で待っておるからなあ！」

僕の後で豪快に笑いながら、店主が大きく手を振っていた。

包帯（後書き）

さて、次回はどのようなのでしょうか？

アルコール除菌スプレー（前書き）

今回は、少し長めです。

アルコール除菌スプレー

近所の小さな薬屋。今日は、ここに用はない。でも、薬屋には行かないといけない。どうしてって？ そりゃあそうさ、あの薬屋の店主に、食事に誘われたんだから……。ちよつと？ いや、かなり嫌だけど……。

「おはようございます。お待たせしました」

既に薬屋の前に立っていた店主に近付くと、軽く会釈して挨拶する。しかし今日の店主は、なんだか様子が違う。そりゃそうだ。いつもの白衣じゃなくて、スーツ姿なんだから。

『何でスーツ着てきたんだ？』

とは思いつつも、言えるわけではないので、サラッと流しておく。

「それでは、行くでしょうかの」

いつもの不明な言葉と共に、さっさと歩きだした。

『おいおい。どこに行くのかも、教えてくれないのかよ……』

と思いながら、特に話すこともないので、後からとりあえず付いて行く。

「ところで君は、どうだね？」

突拍子もない質問に、言葉に詰まる。

『何が、どうなんだよ!?!』

「そうかそうか。そうかね」

『意味がわかんねえ。黙ってただけなのに、納得してるし……』

「で、順調かの?」

『だから、何が!』

「そうか、そりゃあ良かった」

『だ・か・ら、何が?』

「では、まずはモーニングであるな」

もう意味不明だった。僕は黙ったままなのに、一人で納得してうんうん頷いている。そして極め付けは、『モーニングであるな』いつの時代の人だ! あんたは!

そうこうしている間に、ある定食屋の前に到着した。

『定食屋でモーニング? しかも準備中って書いてあるし……』

って考えている僕の事なんて、おかまいなしに準備中の定食屋へズバズバと入っていく。どうする事も出来ないので、後が続く。

「お! らっしゃい! 先生、今日は若いの連れてきたんスね?」

『いやいや、「らっしやい！」じゃなくて、準備中じゃないの?』

入口でもじもじしていると、既に席についている店主が、手招きしている。仕方がないので、招かれるまま席に座る。

そして何も注文していないのに、ゆで卵が一つ、豪勢な陶器の皿に入れられてやってきた。

『ゆで卵一つ?』

手に取って、店主を見ると、丁寧に殻を剥いている。なるようにしかないので、僕もゆで卵の殻を剥く。そして食べる。そして……。

「ごちそうさま!」

『え? 終わり? 準備中の定食屋に来て、ゆで卵一つで終わり?』

そんな思考をしている間にも、店主は店を出ていく。

「ごちそうさまでした!」

僕も軽くお礼を言うと、店主の後を追いかけた。

それからが長かった。無言で歩き続ける事、三時間。一言も話をしないまま、ひたすら三時間歩き続けた。

『……どっ?』

そんな事を思っていると、店主が突然立ち止まった。ふと、店主

の方を見ると、店主が一つの店を指差している。

『ん？ お寿司屋さん？ しかも、めちゃくちゃ高そうじゃん！？』

その高そうなお寿司屋さんに、店主は躊躇無しに入っていく。

『マジで？ …… って、また玉子一貫ってオチじゃねえの？』

とりあえず慌てて後を追いかける。寿司屋に入ると、店主はカウンターに腰掛け、板前さんと楽しそうに話をしている。何だか不気味なものを感じながら、店主の隣に座る。

「じゃ、好きな物、どれだけ食べてもいいよ」

突然の言葉に、頭が混乱した。

『さっきは……、ゆで卵一つだったのに？ まさか、食い逃げする気じゃ！？ しかも、僕を置き去りにして、ダッシュで食い逃げの算段か！？ こんな口車に乗ったが最後、本当の犯罪者になってしまふ。どうせこの人は、ろくなネタを頼まないで……』

と、店主を見ると、店主の前にはアワビ・イクラ・ウニ・トロ等が所狭しと並んでいる。

『……！！ ま、マジッスか！？』

とは思いつつも、そんな遠慮なしに高級なネタを頼む事なんて出来ずに、玉子や玉子や玉子を頼み続ける。

そんな時だった。

「この店はね。うちのある商品のお得意様なんだ」

と、話始めた。

「人間の手つてさ、どれだけ石鹼やハンドソープで洗っても、綺麗にならないってのは知ってるかい？ 菌にも、いろいろあつてね。熱に強いもの。冷たさに強いもの。細胞の組織間に根を張って取れにくいものと、多種多様だ。だから、夏になったら食べ物には、熱を通して食中毒を防止しようなんて、呼び掛けられるけど、それでも食中毒は発生するよね？ で、冷凍保存しておけば、腐敗が防げるかと言うと、そうでもない。しかも、手に付いた雑菌は、焼く訳にもいかないし、凍らせる訳にもいかない。だから手を洗うんだけど、それでも綺麗になりきらない。そこで登場したのが、アルコール消毒除菌薬。しかし、従来の商品では、人体への悪影響を考慮して、それほど強い成分の物が作れないんだよね。で、うちの商品の出番となった訳だ」

【商品名《洗っても洗っても洗っても洗っても》 この製品は、除菌・殺菌を目的としたアルコール消毒スプレーです。手洗いでは、落としきれなかった雑菌を根こそぎ除菌・殺菌します】

【使用上の注意。薬品自体の成分が強力な為、そのままにしておくと、人体への影響が確実に起きます。この製品を使用した後、もう二度石鹼・ハンドソープ等で丁寧に洗い流してください】

「こ、これ！ 面倒臭い！！ でも……、優良商品じゃないですか！？ ある意味、詐欺だけど……。商品名は、やっぱり……。あの『まとも』ですか？」

店主は軽く頷くと、満足するまで食べたようで、「ごちそうさま」と言うと、何やら分厚い革でできた長い袋の中から、白い紙で止められた札束を取り出すと、「釣りはいいよ。また、ごひいきに!」と言った。

『な、な、な、何だ! あの大金!? 偽札か? いや、そんな筈がないな……。それならば、「また、ごひいきに!」なんて言えないし……』

その後、玉子とか玉子とか玉子とか玉子を食べた僕は、家に帰る途中、明日からのやる気を再充填していた。

「よし!! やるぞお!」

アルコール除菌スプレー（後書き）

とことん騙されてる？

精力剤

『うふふんジャポン！ うふふんジャポン！ うふふんジャポン！
裏日本！ 小さな小さな薬屋さん。近所の小さな薬屋さん。今日
も、何かと特殊開発。うふふんジャポンは、裏方ヒーロー！』

浮かれまくって、スキップしながら通勤中。ふと、気が付いて辺
りを見渡すと、行き交う人々の視線が、妙に冷たかった。

「おっはようございますー！」

元気に薬屋に入ると、店主はチラッと僕を見ただけで、たいして
興味が無いと言わんばかりに、すぐに目を反らした。

『んだよ！ 人が折角、爽やかに挨拶してやってんのに！』

少しイラッとしたが、店主の横を素通りしてEVに乗る。そして、
十数分経って、薬品工場に到着した。

「おはようございますー！！ 主任ー！！」

「センコーー！ ざっすー！！」

「おはッス！ しっしょー！！」

「おはです。ようです。ございますですか？ 主将どす？」

『一気にテンション下がるな……』

黒タイツ達のイミフ挨拶を聞いて、突然暗く落ち込んだ気分になったが、ひとまずデスクに向かう。

『今日の商品は……っと。ん？ 精力剤？ 精力剤……てーと、マム○ドリンクとか、バイ○グラみてえなもんか……』

使った事もない。買った事もない。見た事があるかどうかも、あやしいものだ。

『んと……、どうしよう……』

デスクに両肘を突いて頭を抱えていると、黒タイツの一人がやってきた。しかし、そいつが誰なのかは、全くわからない。その黒タイツは、僕の目の前に、ラベルの剥がされた茶色いビンを置くと、去っていく。

『飲めって事か？ いやいや、ここの連中の商品なんて飲んだら、どうなる事が……』

ひとまず、目の前の茶色いビンとにらめっこしながら、フタを開けて匂いを嗅いでみたりする。

『これをヒントに……。っていうか、精力剤の目的って、一つだよなあ。じゃあ……、効果持続時間延ばしてみる？ いやいや、それじゃ能がないな。よし！ タブレットにしてみよう！……』

【口に入れると、溶けてなくなるタブレット型^{パニマス}精力剤登場。いつでも飲めるタブレット型だから、携帯にも便利。ここぞという時に、ポイツと口に放り込むだけ。これで、貴方の精ライフも、ウハウハに】

『バニマス？ 何だか、今回はまともそうな名前だな……。商品紹介も、良い感じだしこれはこれでOKだな』

書類に目を通し、納得した僕は工場を後にした。使用上の注意は、使用上の注意として明記するように伝えて。

【使用上の注意。この製品は、他社製品バイΟグラ・ニンニク・マムΟドリンク・スツΟンドリンクを強制配合し、水分を蒸発させております。強力な効果を発揮する可能性もありますが、何も効果が無いかもしれません】

薬屋店内に戻り、店主に「お疲れ様でした」と声を掛けると、「うむ。お疲れで御座った！」と返されてしまった。

『今日は、何に影響されているのだろうか……？』

昨日の出来事と、今日の特殊効果の出来栄えの影響だろうか、帰りの足取りも、出勤時と変わらず軽かった。

精力剤（後書き）

あの食事楽しかったかい？

商品紹介？ いや、そんな事をしている場合じゃないんだ！！

近所の小さな薬屋さん。そこは、おいしいネタの転がる宝庫。そんな思いで通い詰め、気が付きゃ うふふんジャポン って裏日本の、社員になつて変な商品の開発に手を染めている。

そして今日も、何も変わらず出勤して、頭を悩まし商品開発する筈だった……のに……。つて、ええええ！！

小さな薬屋の近くまで来ると、白黒の車がやたらと多く、車体の屋根の上で赤いランプをクルクルと回し続けている。

『何か事故でもあったのか？』

なんて呑気に考えながら、薬屋の前に行くと、薄い青色の制服に身を包んだ人達や、黒いスーツの怖い顔の人達が、薬屋を出たり入ったりしている。

『な、何？ 何があつたんだよ！？』

店の前に張られたロープを越えようとした途端、青い制服の兄ちゃんに「現在立ち入り禁止です。それとも、この関係者ですか？」と、威圧的に言われ、思わず首を横におもいきり振って、周りの野次馬の中に潜り込んだ。

少しの間を置いて、タキシードの上着にジャージを着用したアンバランス極まりない店主が、黒恐男に連れ出されるようにして出てくるのが見える。

『オッサン、何やったんだよ!?　　ってか、その格好は何だ!?』

そんな事を考えていると、店主が僕を見付け、目があった途端、右手の親指を立てて野次馬の方へ手を伸ばした。

「おい！　何をやっている！」

「早く署へ連行しろ!!」

そんな声の飛び交う中、店主はすぐに野次馬と恐い顔の人達の波の中へと飲まれていってしまった。

『何が……、何が、あつたんだ!』

そう思いながらも言葉に出せずにいると、さっきの青い制服の兄ちゃんが近付いてきた。

咄嗟に野次馬達の中に紛れ込もうとするも、腕を捕まれ、引っ張り出される。

「君、さっき、この薬屋に入ろうとしてたよね？　ちょっと聞いた事があるんだけど……」

威圧的な態度は変わらないまま、腕を離さず話し掛けてくる。怯えた表情のまま、兄ちゃんの顔を見ていると、「君、てんせいりよくって何の事だかわかる？」と聞いてきた。

『てんせいりよく?』

本当に何の事だかわからずに、怯えたまま困った表情で首を横に

振る。

その途端、「そうか……。じゃあ、何か知ってたら、警察まで連絡してくれよ」と言って手を離された。

野次馬達の話によると、詐欺紛いの商品を至極当然に売り捌いていた為に、とうとう警察の登場となった訳だそうだ。しかも、面白い商品があると、この薬屋にちよくちよく来ていたのは僕だけではなく、他にもたくさんいたらしい。そのため、警察も薬屋に入ろうとした人物全員に「てんせいりよく」について、聞いて回っているそうだ。

「……でもどうして、てんせいりよく？ てんせいりよくって何だ？」

このままこの場にいと、厄介事に巻き込まれそうな気がして、僕は野次馬の波を掻き分けるようにして、白黒のランプ車を避けるようにして、その場を立ち去った。

商品紹介？ いや、そんな事をしている場合じゃないんだ！！（後書き）

最近、マナー化してる？

こんな店は……（前書き）

ちよつと趣向が違います。

こんな店は……

今日も暇だ。しかし、もうすぐするとアイツが来る。いつもいつも、何も買わないくせに、変わった性能が搭載された商品ばかりを覗きに来るアイツが。

ほら、言ってる側からやって来た。まずは、店の表に張り出された紙を見て、困った顔で苦笑してから、店の扉をゆっくり開けて、ソロロと入って来ると、表に書かれた商品の所へ行くと、商品の箱を隅から隅まで舐めるようにして、眺めるといやらしい笑みを浮かべると、満足気に帰っていくアイツ。

『アイツには、素質があるかもしれねえな。一応下調べは済んでいる。名前は、岡野^{おかの}久阿^{ひさあ}か。【悪の顔】……。ピツタリじゃないか！？』

そうして僕は、カウンターの下の【重要リスト】と書かれたメモ帳に、悪の顔と書き込むと、素直な優良市民の来店を静かに待っている。

僕は、天^{てん}斉^{ざい} 緑^{みどり}。この文房具屋、【みどり】の店主にして、影大和 ネオ^{ネオ}うふ^{うふ}んジャ^ンポ^ン の総責任者だ。

そして今日も、ピンク全身タイツの戦闘員ならぬ作業員をこき使い、新たな製品に力を注ぐのだ！ 全ては、我が私欲の為だけに！

近所の小さな文房具屋さん。そこは、小さなネタの転がる宝庫。
そうそう、そうして、この店は次代へと繋がれていくんだ。

「いらっしゃいます〜！ 今日も冷やかしでしょうかあ〜？」

完

こんな店は……（後書き）

短期間、約二十日間でしたが、ありがとうございました。
もし宜しければ、評価点・感想等よろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6735w/>

こんな薬屋ありません(^-^ゞ

2011年10月3日10時37分発行